七日にして御親閲當日まで僅に八日を餘すのみ。

旗は大體に於て由來ある舊校旗の姿を捨てず只現時の制服と捧持行進に適するの大さとなすことにて裂地は學校に藏されし模古名物裂を使用することゝなれり　何分大早急を要することゆへ即日此裂地の尺量を基として雛形を作り捧持に適する大さを協議測定し且つ全體に渉る圖稿を作り翌日校長の決裁を經たり　爾後六日分擔を定め最大速度を以て進渉することゝし渡邊は洋服師に白羅紗を索め刺繍師に手詰の談判を行ひ裁縫師に膝詰の交渉を遂げ總紐の製作を無理押に注文する一方には和田氏は關野聖雲氏に當りて竿頭目標の美の字の彫刻を迫り鈴川氏は臺麓の古武具店に柄と爲すべく六尺の手鎗を索め購ひ來りて直に之を六角紫水氏に囑し塗り改む　又清水龜藏氏は八田〔辰之助〕研究生を督して金物全部を作る等三方四方皆大緊張を以て支障なく進み十四日午後約を違えず集り來りし諸式を八田研究生を助手として取纏めを了りしは室内やゝ暗き午後五時なりき　鈴川氏と共に玆は安堵の胸を撫下したるが鈴川氏は其夜此新旗に神酒を供へ燈火を掲けて清秡の意を致し翌日の御親閲を待ちたる次第なりき。

扨出來の新校旗は挿繪に現はれたる如く大さは巾一尺九寸五分竪四尺一寸五分柄の長五尺九寸なり、表の裂地は銀地唐花文早雲寺錦に緣廻りは茶地向鳳凰圓文錦「二人靜」なり　共に龍村平藏氏の模古織成の名物裂にて裏は之を入れ換へとなす　東京美術學校の六字は本校創設に際して時の教授黑川眞賴博士が揮毫されし大師樣の大門標の文字にて現に文庫に收藏さるゝ深き因緣あるものにて（現今の陶製門標の文字は則寫眞縮少によるものにて文字の大さ適當なれば之を拓本に取りて轉寫しやゝ布〔字〕を改めたるなり）表は黑羅紗裏は白羅紗共に撚糸を以て緣取り千鳥懸となす金具は横上兩端の鍍金金具は美字と唐花文を彫刻し其他けら首、逆輪、紐付鈌、石突等皆素銅なり　柄はうるみ塗千段は青貝叩なり（青貝叩は遂に間に合はず後より作ることとなれり）　目標美の字は金箔押し三方正面紐は古袋紫型四つ打本切房總角結なり舊校旗は勿論由來深きものとして丁寧に保存さるべく新校旗は此度の御親閲に最初の光榮を荷ひ爾後機會ある毎に本校の標象として光輝を加へ行くことゝなれり

昭和四年一月八日　〔渡辺〕啓三識

（『東京美術学校校友会月報』第二十七巻第七号）

⑨ 六角紫水の楽浪漆器研究

関野貞の朝鮮半島古蹟調査と小場恒吉の模写については本書第二巻535頁に記したが、関野の発掘品中、注目すべきものに楽浪漆器がある。大正五年の調査の際、楽浪郡（大同江一帯の地方）の古墳から発掘されたもので、小場恒吉や大村西崖は早くからこれに注目し、高く評価していた。大正十二年に至り、六角紫水は京城へ行って実物を見、その技術に感嘆して技法復興のための研究を始めた。翌十三年秋にはさらに楽浪漆器の発掘があり、前回発掘の分も含めて年代もはっきりしたので、学者の間で強い関心が持たれるようになった。その間の経緯は小場恒吉著「朝鮮楽浪漆器談」（『東京美術学校校友会月報』第二十四巻第二号）、六角紫水著「楽浪発掘漆器に関する講話」（同誌第二十五巻第三、第五号）に詳しく記されている。

紫水は五年の研究の末、その成果を研究試作展として昭和三年五月五日、六日の両日、本校会議室で発表。前出校友会月報（第二十七巻第二号）が、

出品點數は樂浪研究試作約五十點と外に同教授が之迄研究せられたる色漆研究、燒繪、錆繪の研究、末金鏤の研究及び古名品の模寫研究に關する標本作品等三四十點を加へて約九十點であつた、樂浪漆器研究は現在の漆工界の一衝動として多大の注目せらるゝもの故參觀人も二日で朝野の名士、特に工藝家等約五百餘人にて非常の盛會を極めた。

と報じているように、大変注目を集めた。参考までに小場恒吉の同試作展の推薦文と紫水の案内状序文を左に掲げる。

朝鮮平壤の對岸、大同江に沿ふた廣袤二三里の山野に亘つて、漢代樂浪郡の古墳が大小多數に起伏して居る　此等の古墳は、明治二十四年以來屢々考古學者によつて發掘調査せられたが、幸にも私も度び〳〵其調査隊に加はり發掘品整理の任に當つたので其の詳細に通ずることを得た。就中、大正五年秋の調査には貴金屬器銅器、武器、玉石器、陶器及漆器等各種の副葬品を多數に發見したので樂浪の名稱が一時に學界に喧傳せらるゝ樣になつた、其當時私は漆器に描いたり、毛彫りをしたりしてある文樣の未だ嘗て見たことの無い精細流麗な樣式であり、其描法の餘りに巧妙であるのに且つ驚き且つ喜び大略の模寫を作つて、漆工家の爲め參考資料として美術學校に寄贈したけれども、獨り故大村西崖先生が、前代未聞の大發見として激賞せられたのみであつて、未だ漆工家の注意を喚起する迄に至らなかつた。其後も屢々樂浪漆器の珍貴なることを說き、是に據つて御手本として、衰微の極に沉淪して居る朝鮮漆工界を改良して、特產物を作る樣に勸めたけれども、何れも實技に疎く唯考古學者の報告に滿足して居る人のみに過ぎなかつたので甚だ遺憾に思ふて居つた、然るに六角紫水氏は關野博士の談や私の模寫圖などにより樂浪漆器の優秀なることに着眼して實物研究の要を痛感せられ、大正十二年朝鮮に渡たられ朝鮮博物館所藏の漆器一切を親しく調査し、漆畫の用筆、毛彫の小刀に至るまで工夫を凝らして今日に傳はらざる古法を研究され、爾來數年間不撓不屈の熱心と努力とを以て樂浪樣式に模せる漆器數十點の製作を試み、殆んど他人の追隨を許さぬほどの新技術を表して世人を驚かされたのが即ち今回の展觀の漆器である。此等作品の漆畫や毛彫などの技巧熟練といふ點に至つては未だ古へに及ばない恨があるとは氏自身も言ふて居らるゝ處であるが器物の形狀や文樣など必しも樂浪其儘の模倣のみでなく、其の長して居る精神を掬みとり、之等に我が奈良朝平安朝の樣式を巧みに加味してよく其調和を保つて居ると云ふことは彼此漆工製作と圖案とに精通して居らるゝ氏の如き人でなければ到底能くすることの出來ない業である。變化に乏しい現代漆工界の前途に新樣式を產み出されやうとする氏の苦心と價値とは此等の作品を見る人々の直ちに首肯し得ることであつて熱誠なる氏の努力は今後必ずや樂浪の古法を復興して現代の要求に適應する新趣の漆工樣式を完

全に大成さるゝ事と思ふ。

昭和三年四月

朝鮮古蹟調査委員
東京美術學校講師　小場恒吉

（『日本漆工会会報』第三二五号。昭和三年五月二十五日）

樂浪漆器研究試作展觀に就て

近年朝鮮樂浪古墳より發掘せる漆工品に依りて、二千年前の支那漢時代に於ける漆工藝術の進歩が既に其の絶頂に達し居たることを證明せられ、今更に、我々專門家は瞠若驚倒せしめらるゝ次第なり。予は斯の如き技法、特に現代に於て殆んど豫測だにせられざりし此漢代卓絶の技法が、其傳統を失ひたることを遺憾とし、何とかして其一端なりとも獲得復活せしめ、以て、今日行詰れる我が漆藝界に一脈の生氣を注入打開せんことを思立ち、去る大正十二年以來此方面の研究に沒頭し、今尚孜々として努めつゝある次第で殆んど他念なく、爲めに昨秋帝展第四部の始めて開設せらるゝに際しても豫め其出品製作を爲すの遑なく、出品を斷念し居りしに、親友中には之を遺憾とし予が研究試作品の中より出品せんことを懇切に慫慂せらるゝあり、依つて試作小品二點を撰み出品したり。然るに圖らずも、或る一部の人々によりて誤認せられ、甚しき非難を加へられ、延ひて工藝界に一場の物議波瀾を捲起したるは、予の實に意外とする所にして、迷惑遺憾共に尠からざる次第なり。然れども予は自ら顧みて疚しき所なきを以て、疑雲は遂に消散するの時あるを信じ、姑らく隱忍沈默して自ら戒しめ、當時直に辯白抗爭を敢えてせざりしなり。幸にして予の苦心せる樂浪漆器の研究は近來漸く一道の光明を認め得る程度に進みたるものあれば、玆に研究行程の一端を公開して、大方識者諸賢の御批判を仰ぎたく、從來實驗試作の小品數十點と其研究基礎たる樂浪出土の實物數點とを陳列して高覽に供せんとす。幸に寸暇を割いて枉駕一顧を賜はらば寔に光榮とする所なり。

六角紫水拜白

（樂浪漆器研究試作展案内状）

紫水の言う「甚しき非難」云々とは第八回帝展第四部に彼が出品した「方盆」二点が代作であると非難されたことを指す。即ち漆芸正風会員十九名（代表堀井政吉、梅沢隆真）が紫水の作品はいずれも自作にあらず、帝展規則第七条に違反するとして撤回を要求する決議文を可決し帝展当局者に提出、これを各紙が一斉に報じたのである。

紫水は漆芸正風会員十七名を名誉毀損で告訴したりしたが（昭和三年二月）、正木直彦の尽力により事件は昭和五年に左記のような解決をみた。

○六角紫水氏は多年樂浪漆器研究に從事せるが、昭和二年秋帝展に出品したる其の試作方盆に對して、物議起り、爾來氏の名譽と信用を毀損せしめたる漆藝正風會員等十八名（高野重人、中村瑞香、結城哲雄、三田村自芳、深田駒吉、小西重太郎、佐藤陽雲、月尾發水、莊司芳眞、河合秀甫、福島泰哉、岩瀧尚美、竹森三

治、多畑宗哉、高井泰令、堀井政吉、堆朱楊成、梅澤隆眞諸氏）は、其の非行を覺りて、今回正木美術學校長を介して、衷心謝意を表明し、二月六日上野精養軒に會合して舊交を暖めたれば、六角氏も同校長の保證に依り、之を誠意に出でたるものと寛容せられ、茲に事件の圓滿なる解決を見たるは、漆藝發達の爲洵に幸慶に堪へざるところなり。

（『東京美術学校校友会月報』第二十八巻第一号）

なお、この事件の遠因は紫水と辻村松華の対立にありと見る向きもあり、そのような報道もなされたが、松華は事件の最中に死去した。昭和五年十一月六日には紫水の楽浪漆器研究成果の一つ「暁天吼号之図漆器手箱」（第十一回帝展出品作）に帝国美術院賞が授与された。

⑩ 唐宋元明名画展覧会

昭和二年十月二十八日、正木直彦校長は外務省対支文化事業部の用務を帯びて、本校書記兼文庫主任北浦大介、帝室博物館美術部長溝口禎次郎、漢学者田辺為三郎（碧堂）らとともに支那へ向けて出発した。他に画家渡辺晨畝が先発して北京で一行を迎えた。北浦は正木の補佐役として随行したことが左記の上申書控（「昭和二年職員関係書類（庶務掛）」）によって分かる。

案　支那出張ノ件上申

東京美術学校書記北浦大介

今般小官支那出張ヲ命ゼラル、ニ付テハ渡支ノ上親シク多数支那美術家及碩学名士ノ輩ニモ接見シ日支両國美術上ノ親善發展ニ盡力致度及ブ限リニ於テ支那古美術並現代美術ニ就キテモ調査視察シタキ希望ニ有之滞支中ハ非常ナル多事多忙タルベキヲ豫想サレ候　就テハ右ノ者ヲ隨行者トシテ帯同シ彼地ニ於テ日々逢着スベキ事故ニ際シ幇助者タラシメ度候ヲ以テ同人ヘモ支那出張ノ御発令有之度此段上申候也

年　月　日　　学校長

文部大臣宛

追テ出張期間ハ一箇月餘ニ渉ル見込ニシテ旅費ハ外務省對支文化事業費ヨリ支給サル、見込ニ候

正木らの旅行は東方絵画協会役員としての任務を帯びたもので、最大の目標は第五回日華聯合絵画展覧会（北京）の実現を図ることであった。一行の足跡は正木の『十三松堂日記』によって把握することができるが、彼らは十月二十九日に下関を出港し、翌三十日釜山入港。十一月五日まで朝鮮各地の遺跡や古美術品を見学し、翌六日奉天着。七日北京に着き、遺跡や美術品を見学したり、東方絵画協会員たちとの交流を深めたりし、特に正木は同会の事業の障害となっていた金開藩、周肇祥の対立の調停につとめるなどした。同月二十二日には天津へ行き、同様に見学、交流を行い、十二月七日に帰京した。正木の「支那旅行談」（『東京美術学校校友会月報』第二十六巻第八号）を読むと、彼が今回の旅行に少なからず感銘を受けた様子が判る。彼は大村西崖の東洋美術史研究や中国旅行を積極的に支